

WS01-3-6 80歳以上の肺癌手術症例の検討

出口博之，友安信，重枝弥，兼古由香，辻佳子，谷田達男
岩手医科大学 呼吸器外科

【背景と目的】高齢者に対する悪性腫瘍手術が増加しているが，肺癌も例外ではない．当科における高齢者の肺癌手術の臨床的特徴を明らかにする．【対象と方法】当科では2010年から肺癌に対し完全胸腔鏡下肺葉切除を行っている．2010年1月から2014年12月の間に行った肺癌手術のうち80歳以上の群（以下高齢群）55例について59歳以下の群（以下若年群）57例を対象として後方視的に比較検討した．【結果】背景因子は性別，臨床病期，病理病期とも割合に差はなかった．術式は肺葉切除+ND2aを標準として縮小手術を行った症例が高齢群で7例，若年群で1例と有意差を認めた．その内訳は高齢者群は郭清の縮小3例，呼吸機能障害2例，高度癒着2例，併存疾患+高齢1例，若年者は大血管手術前1例だった．切除範囲は高齢群で肺全摘がはなつたが，若年群では5例だった．完全胸腔鏡下手術は高齢群43例，若年群48例で差はなかった．手術時間は高齢群/若年群：277分/296分，出血量は高齢群/若年群：129g/125gと有意差を認めなかったが，術後退院までの日数が11日以上症例は高齢群18例，若年群7例で有意差を認めた．【結語】高齢群55例中，縮小手術は郭清範囲の縮小以外で年齢を理由にした部分切除は1例のみで48例に標準術式が適応されていた．しかし，侵襲の大きい肺全摘は実施されなかった．手術時間，出血量も若年群と差はなかったが，退院までの日数が有意に長く，その原因についてさらに検討を加え発表する．